技桑孤集

二十九中

伊地知文庫
文庫20
360
33

文庫20
360
33

拔萃拾葉集巻第二十九中

目録

うゑてわたりかけける道の記　豊后藤俊
吾妻の道の記　同
敷山の由来　同
花山の言葉　同
ゆきて木と植る詞　同
妙喜院のたてる銅　同

稱案内通よりたる分
松平越中守つたる分
駿河及ひ遠江より出る分
道春法下より出る分
伏川田の何しよりたる分
外寄院銭分
春日川御つたゆの分
永喜法下銭分
正意法橋銭分

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

東京都立中央図書館 文庫

扶桑拾葉集巻第二十九中

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

はしがきてのはるかゝりきるこゝろの記

豊后勝俊

渉水の中海のこゝろ

きゝゝ山とも紅とて

夜とゝもゝ紅とゝ驛のすゝ山

ゆゝてゝのみそ紅くゝ出るゝる

ゆゝてゝのみそ紅くゝ出るゝる

ゆゝてゝのみそ紅くゝ出るゝる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪のゆもかるる雲
ちりて出しの花ぶさ
まつ之むうの梅の雪

さらみな世によりて花の
ゆしてかをまぬきへて
のう岩よりしたかれ
かりて頃苦よりと為
はるの山うすむらさきの
二八三八というんまつ
くらうとをよりかこの
ちく移へぬんらく

かう茅よりてぬ人間かうう水海い梅とをとう霊
のかりて行ぬ花かれ思へけぬ白紙と江戸と
又有る和ある夜月乃岩うきて食
祇園も都遊さわらしの
とかのの月をみる郭
彩月いまやみやこの元かん
かとしとうるを人は作へと
ちる乃宿かまちかとふむ
ゆかしかうち流れい雲を彩
夢覚とをを梅る星の元
角田川らしとて見る彩今毎のれとふの

わすれぬるせやのけん

ふるさとの東海道を思ひつゝ

角田川原の渡舟をまつ

をはてゝ名ぬしと称まし角田川

しるしなるものぬ若もらせ

このり来る渡よりのを京の観音をうて

舟を御ゆるし・ゆるしてゆるして・国住をうしなて

行舟や帰迎かうしゐを京の

ふるさとをいまのみのうつる

五月三日京へうてて・舟の住をく・富原と云所

岩ゝをゆるまゆるしいゐゐ富ふるの屋をう

今く・ちゐさめく御御前よりてきし河・河のるの

ねうをやけん・京ふいめてゐ紀せうるは・一盃にし

めふるゐ・のうせ・のへゐあらかくいふ・のほまわふ

ぬへく・ゐやせけかしふをうらかうて・いまとう後

生ゝへいと・来ゐゐもいれ乃えてまかんそゐらぬふ

この物ゐまへよををくい・京ゐゐめこれのいふいふん賀

ん・けやめかう物くいしてのしらてをとゝ・前

ゐる人のれ乃せらゝ事ゐを・寿乃ゐゐかも世れふ・ゐ

けをそうんてみれい

書みゐもしきふうん思ふん

けやめうう物くゐせのうらを

みちくさ　なるこうか　かりいえ　みあきしまし　きそのう
なるまうのや　行みらみ時雨れ降りけるとき　ぶんし
きのうら　山のかきもやとし文

行まくらもてねさまをかたしき
きのうらし　山かりみもしのうら
ちかくこそ　ふいて　遠うらの　かりねしに　いそぶり　迎く
かりぬ　人こかりし　かまぼこ　ほえいらほうら　ぶんしも

吾妻のみちの記

同

三月廿日余の　うら　ほい　うもとして　東よりの
山　きるもの　人こかうう　いらみて　うちとうう

きるも　の　坂の関の清水　力をそて　今かの　ゆ　ゆ
りぶし　かの　ぶし　きこ　人　ゆ　行　山　ぶし　ぶ　留て
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

真日の迫の石井　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
かみ山　ぶし　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

かみ山　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

古今よりこのやかみの山とあてふれて　かひ　ゆ
見ぬ君らに　せいと　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]神社[illegible]
[illegible]
[illegible]

まし雨と見れば雨もしまりてあり
世の人のおもひまいらせし
神しるしなりけり
そこに厳下御所のとのもめぐりて三日のまつ
りあるべしとて人々はらへをして
安中のしるかりまいりすべし家のうち
人みな潔斎して石をとりて廻りたるう
かしこみめしのやうなる事なり御所の
おとこ山のなかのよりきをもめこの所に
かくしてもいるつねのことと見て
なれわかれて色義をしたし

十二日まで唐中納言・清見関・富士の
浦のひろき海山のあり様ことに
て言葉もなし人々ひとりぬかれ
きは浦の月はいとあはれなるに
しも見つかりまし山かしのくれ
ぬるとしたい
月吹きせ無波風
うらうらかなる浪のまもり
かれ不二の山をうれしと思ひの雪いとせよ
うれしと場をいと田よれ浦うれしとうれしき
小鳥かうめ鳴る雅至文なく

問ふてゆめとのうらるとし待ん間
ゆめのうらなひ松の雪の考る事
わかゝくらん人のうらる
東路のあいの山みちかすみし
出る月をかきの神のうれなる
雪のうらなし雲とい常みとるかる
ゆめのうらなひ雲の物思ひ
空しらぬ雪の数百二の松の
うらなかしる雪のむらさめ
ゆめの松風みるに物思ひぬ
雪のあを雲の雲はわれとなる

こゝろ長い道をわけの若木のうら見ぬ人をしたゝ
ゆるかさのいのゝ山ちまつ・おれ道ようゝ深く
して・のみのあきけりとまれ行くの人の庵
歌山ゆうらう

同

あしかこのまちうれ・我とうの松のむらの・雪
みゆかれからぬ山行・かみ世かゝ世れこと考と
くて・とれむとうのうしめとうをうれ・わうい考ぬ
あへ・・松とうらる出の山のうれ・ひのみ
出ますゆとゆうとゆなるゆうゆ考る浦
教法京とくゝ行らる・せうせこうゆ・山九紅葉し

[illegible]

[illegible]

[illegible]

去る年、ある人、さるよう、河内の人の子、ひるまいたらう
うえんよこ、ゑとうさへ、しうは、あるいは、去りものぬみ
ちみ、ゑよりと、ちかし、この時、ものうらうして
大嶽よりて、ちかし、ゑよ、ゑ、ゑ、ゑ

[illegible]・昔今の物語・[illegible]して・昨日[illegible]
給へる・君は八九の間もよて・すめらぎと衣[illegible]
思ひ[illegible]給へ・[illegible]・[illegible]
[illegible]れ[illegible]・[illegible]・[illegible]
かゝ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]千里の涙をそゝ[illegible]
[illegible]の物[illegible]・[illegible]寺[illegible]
[illegible]・[illegible]・[illegible]
成[illegible]
[illegible]の[illegible]・[illegible]法師[illegible]
[illegible]書[illegible]・[illegible]
[illegible]

[illegible]・[illegible]・[illegible]
[illegible]の[illegible]・[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]・[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]月
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

胡[illegible]今始[illegible]遊[illegible]
西[illegible]日傾[illegible]牧笛[illegible]
慈[illegible]獨[illegible]詞花妙[illegible]

[illegible]地風頭[illegible]逗留
東湖月上見漢舟
傳教古風佳句幽

北斎長歌人丁瞬　無窮感慨水悠々

ゆくふしいまり根本中堂よりゆくて・紅の葉を入とかゝ
うかれあるき

三度行うゑ一度とうゝとのゝえし
そこにあるもしらぬ山や岩のうみちん
山某所傳教うつゝとのゝばらめ・三度らいゝあ
ゆくうゝ行へうゝ云津・渡うは志ゝきん・植武乃いゝ
物也思いゝ・杉木のあるとうあよ・淀成の色とし
かいあるかゝ・ゆくとゝ百川の平餘日行ふ
ゆくとゝ・御門渡ゝきめ者う・江ねよゆゝ子と行よつを
ゆくしうあ・色斉の養王の庭よ七日哭せゝめゝ

れとゝ如ゝかうゝ・なかて鶴藤岡とはゝくうれ
きうきんとふうゝ・夢之れゝ乃歌いかゝこの志う
くゆゝ面ゝよゝのうゝ・ゆゝ行ゝかゝ志れ面し
なくゝ見ゝなりふゝ・いゝ岩ゝ藤のちよゝかく
かん・定家のゝ志とゝ九れゝ・ゝれいゝうゝて・滅い
九重のかゝゝら柿ゝの道ゝ・今の相国寺乃ちよ
時面乃寺ゝゝゝゝ・長禄の比ゝ年安の八月
廿日ゆは・ゝてゝゝ人ゝ状のゝゝ迄ぬゝゝと云ゝと・一と
ゝゝゝゝめよゝて奇ゝみゝゝいゝゝ所面
人丸の墓ゝゝゝゝ所ゝゝ・鶴の長明ゝかきゝとの面
大和よて人丸の墓ゝゝ人ゝ・奇墓ゝゝつぬゝゝ

かすかにかをるとはいふ。花とも見まがふ。大きい梅とも見る。
志ぶるうこうせく。成都の海業国司藤氏の宅にまねいる。
橘ノ房のうち。浮世ノ月とうたぐてはるかに石見
の国をうし。遠き世のまいらのみたちをかくく。
よとめのうしかうらふれ。三條の内大臣賞
隆し尋ねうし。京のかたにまかりとかる
三年をかくさし。誓年一日もうちかたらうん
ノ仏をうしかりし。人の世ノはかなきこというせん。
桂川の流れ。ふい雲とわけ雲はものとも
作うしかりける。このやうにうしかる地とかり泉よりうる紅花
してかるる色うとしかるに谷ノ底ノ山人

なる。ちいさく見てうし三塗ノうくるよ底ノ。
あるしかりしかるなり。藤の家法海山寺家ふ
あるて。天門とわるるやうん。みれば物とものの雪
れ海ふ。印ノ世をノうまの入口とうもちうる海
ノて。秋の初と尾張ノし波ようるの翠空紅花せる。
日ものを引ものを。ものこうそはしの紅ふ。水のわし
うるものしかれて。うるもくかみばうけきん鶴
ノもの。行生活のノうるかちいさく。ゆるもしのて
波ようるうるもうし見うるかいは。
めるをうを引枝のうるしと交うて。うしのうさ海
ノ見ゆるをうし。ノ底ノ待うる光のぬ。出家の法

如是とおいてきみそもしら一時のれいをまて・そもしらず
ゆ天の若のきき・天暦の御門のうやこうの雲の八重
あつしの殿へ・宮殿を後にして・床や
うみうなかしもみか・それのすゑや・ひろかり時よりの
花とかきしる白の・人らうそ・ひるの慶すき
おりんいきをにらいさあ・ふるし・伊勢・ひるし・墨子
う涙ちらしぬへ・・和とかう校とかうん君ぬ・面ふるの
絹ノ一ちらよらゆかきをあ・山津ちらのうるる
行かし・みきの山の井のしるしいる出・きふう光ノ
素大納言源氏の文ちうの
橋門後やむ・・ノ涙と朱てちへは

うへぬ水きし出まんかの影
立去のへ後やきてかん笛竹ノ
橋門の校ノ迄一世の人
花山ノうゆ葉

同

花山と空ゆるか・山ひ・良岑の宗貞といひし人出き
して後・出家する・ふんりうする・山行道の山作
ちみて・ゆとうちうたほとかるしこ・ふ行ひしいよ
見よ面ひうあしじ思いおてゆてぬ・人かち面
くしわぬちうかるしと・和ほとくのをまとむちう物
あうちうぬ・賢とかうぬ・玄源くかとへ後ノ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きいとくのかれきんう・とりのうたれたるもの・松風物とくく吹くく・あく夜
うけの下ゝ空・まつのいとゝあのしく

天地陵松種德全　撫民芸履詠秋田
如今新拔千朝淚　疑是風声彈五絃

雪の初の夜のうちみとくるとよ・不留に
長記りめく・かくしこのをみくゝあれと・有明の
月の如くく・霧のかゝるはらちかあく

花はまいうしかゆうの山れとも
ちのこらはく有明の月

ぬきみて木を植るゝ

同

記者に和れ橋成りしかして・我国よりつる年作り
有力のとの庭まの山を和いらちく人やなとと
思いあるゝ国と無りて・業平の朝臣女とぬ
く・あくしのく河のかとうまて思いある・色よ
ゝるゝ波の悪しきに・京しまき見ふくくとも
出ゝうん・京性法師ゝまはあるゝ・かれと
橋人和るかいきん人い・抜ゝふしとのこゝとあちく
ゝ・ゝる和るゝ波と使ゝし・花きなんけまて・か
祝て立信りきく風ゝい・神ゝの神と祝ゝ
ゝとゝゝ河ゝ・ゝる立ゝ去かしこの人見ゝ年

かゝいとなる郭橐駝うゑはよく木をうゑる事
このごとくせんと拾ふことなくきらひて我このてゝとゆ
うれば字この事をきゝうるをれい朝よりくれて火をと
ゝみて夜うゝ作あるはいて光をとゝる字その花はつゝるに
はうかうはいとする故ゆ還て性をそこなひとゝのかゝ
うれとなるもゝけり去わてゆゝをそこなひ肌膚の高の
つけるを打去るかんきうゝゆ阿衡文を作りてもちゝ
楚の公子のゝゝ時真僕筆をとりて寫ゆし由
うせる光するのゆまゝ字ゝ乃紀の木を千年持ゝ
ゝくせらるゝいるる用ゝ字ゝ字木のゝれさう
をうゝを生てうれは之の作ゝ君臣乃義の字

瀧溪ゝ岩石の美を説い渓明ゝ孤松を問るすき
み ゝに故ゆるゝのかし今は木をうつゝて ゝうゆ
ゆのゝむゝいゝゝ ゝゝゆゝゆゝゆとめるれとゝわはう
ゝ字いゝゆせんゝをゝのゝゝゝゝゝまかせ之の
ゆをめるゝゝれを去れゝゝゝゝゝ之ゝゝこゝて世やゝと
ゝゝゝゝゝゝ耳ゝを生きて小都ゝかゝけゝ清
ゝ電ゝかゝゝゝて ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ天地美物即一株自家他家即一室ゝゝの
ゆゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて花咲かん相学必ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
宴をまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こゝろなくわすれ・こゝろをたてゝ・清めをそなへ
たてまつらんとおもふ・うつくしきこのめなれば
ぬきみもいとのしるしなるべし・いのゝ山ゐのほと
ゝしかな

今年はいと寄なりとて
花のゆゑしと人々をさそひ
妙寿院よりたてまつる

同

ゆゑ深の志みなれば
かのゆゑなれば・常の
ゆゑなれば・ものゝ
ゆゑなれば・あるをも
ゆゑなれば・玉のうて
なれば・あはれ
なれば・ものさびたる
なれば・

かりうかとふ男はいとうるはしく・上はゆるす世の
有をあはれとおもふ・袴をはきて・扇をかざして再
ばとをとなへ・高らかにうたひ・うしろをかへし・清をもち
ゆとうたひ・うたふかくふしはまをとゆん・つゝ枝を
はらひて・ふきいとをかしく・をこがましく・
ちをなして・ものもとをとなへ・数のまつをもとをかく
り・清をすゝめ・かゝりて・芦をかゝりて・今よりかりて
ばとをいはるゝかゝ・いのゝのあをかをとかをとを
宿のゆゑまいの・天ゝをあをかをとを
原の松虫の声を・きのふの乃木をとをらく人・市の声をい
とゝ門を・芦を八重・芦津・世世・我ゝ・ゆゑ・乃木・乃木・

かしこいあるべきかぎりにうつうつ[illegible]
たちて秋の田乃かぜいと花うつくしきを
人のたのみとゆるさるるほのかにかけて[illegible]
若菜あるみなく遠き嶺をしあるべきまでに野分乃
のちの気色ありて中こえんかるきみ行牆の花
と沒る見れば[illegible]小藤うるはしき
まれにて又人目かれぬ谷物とうるはしきの
きゆ大方しらぬ[illegible]の[illegible]山陰かれて皮と
しきみなれて[illegible]
木もも白桃もきみ義母はいて旦とうるはしく
あのうし[illegible]松乃秋風室よりかぜ家

茅村を度て霧乃玉の緒吹とく[illegible]
面[illegible]山ゆく[illegible]
ゆくとしめかれと[illegible]
やこと[illegible]
夜[illegible]
神とうるわと[illegible]
[illegible]
[illegible]

きのこみ・かたう四の物いのこりなく・とをらう千里
しをとしとすまし花のいろいろは華厳
乃まちかくうしして・初夏さ卯月のこまく十
の道あやまりぬとしぬ（ほ・そ）角ぬ人のと浦をさし
せめてい空をたまてしかん・空して山ん・雄史の猴
はらう伊勢・壁よりをもをもを地しいろかけ・是
く変鴻乃ひ乃つめんと情物ならぬく・かめ
る岩の玄象の花・のをかくらく・うち向山我い
らこの空物せる窓の中よのぬ物ふをれ浮雲こ
しらう巻よ初る横外横とうやいらぬの・枕と雲み
ゆしてひはめら落りん・古はるかるのををもん

ぬし・麓と由をしらをへけをやうを見て・ぬ人物とう
をる窓の内・うの中ぬ・ぬてけ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ
物ぬをすみうかしかんをを有・ぬ・ぬ・ぬ山つみ
ましぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ
ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ
ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ
ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ
ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ
ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ

きりし書たしかなる物と思ひ、その比乃
とのゝ何のゆへのことゝ事とも、月の かゝ物語りかたみ
にうゑぬ月数の作もうて、年の行ふし、ゆくとゝもし、
何なる製し有りけんや、かゝまてし初ほなりて、
中植ものうゑ物まとゝ、南のすゝ端の星
人のかたちへ、ふかあらしもめて、ゑもとつかうし、ゆへ
祝のいとう雲なんと今し物をけうちかあら、
いし物をかとあもしかるめしと、狩つみ(そのて)したる狩をい
きてしのゝ、そのほとかつ思いとのゝて、とうし
のそうれ雲飛ぶ生、ゆえ狩の筆業れ古風とまもい
とうかつすかゝと云業いとう見ゝうかゝとうさ

きりと、ゆまうゝ日周とみゝぬ公物うを法、祝うさ
まりけりと、なゝうかゝうそうゆゆけまりゆ、
かゝ物れ、きほれ、ゆ、ゑとけかゝやあうきんを
世間人乃尾京かゝ物ゝ、ゆ世せは
我しあゝかゝ、ゆんゝもいゝ
塩ゝうよゝしてゝ京ゝか我ゝゆゝう
ゆゝれる酒と君しのゝ、

稲葉門辺よゝ作ゝとゝ業

稲葉

同

稲葉の山の若ゝ世、暑ゝ行ゝ松乃ゝきほゝとゝ、
作ゝゝ、枝ゝゝゆゝまゝ行ゝ周辺かゝきゝ人、ゝゝゝハ

故中納言秀秋卿よりこのせうしと、のるゝ中もなき異
うらもと・魚の水よりのるしめん雑彼のうをのうらのし
ぼくるかしと・うゝ後〳〵もてとらるゝあるみとうしふしをも
この三今乃御代のうらめ浦〻・石田の業世波みう流
よ天の下かゝし記わるしうゝ後ほいと・うれよみ上き
ないなら拾し・うゝかゝ・世ないのかゝ・記たにのまの御
家〻記あまうら・家接ぶうゝこの海乃うゝかゝるよつゝ
まつ・紀とわけて月とうゝかいのうけゝや・ほかよ俳
業の義作や久本のうゝやまうゝ・二行の風の御うをとう
あゝ〻ぬいかゝ・かゝかゝいのんうれとれ才の業なをい
とわゝてゝせかゝいのゝ〻ゝきいゝかゝ・三ほゝ

〳〵うこみのこれ記うゝかみとうゝ流・勝つれうもとあ波かあ
いうゝ・のうゝみとうゝ・かみれうゝ・あゝ
のいよりはうゝかゝうかゝ波ほうゝ・あゝ
〻ぬこのうとをゝ・うゝかゝ・ゝかゝけて秋
ゝうらの武士ゝ・ゝうゝかゝ
ゝうゝけゝ・ゝれゝ・月の木の業ゝ・ゝ波ゝ世ゝ
かゝゝとのゝを波ゝうゝよのゝれゝのうい・ゝうゝ
ましゝ・のゝいゝ才とかゝ世〳〵ゝ・ゝ波ゝ世ゝの
うゝみゝ・ゝうゝて・ゝゝぬせうゝのゝうゝれ・親ゝ
子四のゝうゝれゝかゝ・妹ゝ背の紀波ゝ・ゝうゝ紀
業かゝ波ゝ・ゝ名ゝうゝれゝ・秀秋の御世・かゝかゝぬれ
うゝ世波かゝ・用迄いうれ〳〵世紀ゝうゝれゝと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

りゆめ忘れん。ひいでうの花にこれ紫のいか
ばかりと。松平越中の君ゆゑ人もうれたる事かな
あやし。おもてもあかへとふるまひ
や。老てしくしるしもうしなもうたて。老果色に出たた
きたるみちうれたしとぞうらもいたかり。今歳云ひ老樣
う茶堂とあつて。冠相の魏野よりもいとうあめり
いかうまみ記つまし

板あるる門かくまわかしも
なりもとうしみ人のとしきん
霧わかうらいをかりもうもうや
夜ふかう去ひけるとのうら浪み

せこの今度のわかうの毋きみまして。いまの世の人と
わかへこうけしとのよのうち世ひ。武の茶茶
うちかへいと。四西の秋風編茶の雲をとうかへわきし
かく。うはさに大西のかほくゆふしるとも。そそぬ
裏のかるかまとも及ぶるうこい。れ分後をかいへ
つくれ世紀うとかてとかや。愚いゆれとはうみ
用もうつぬ。せめてわかつ京の書種なる。文湖別の
京うまる。行九とせのう。茶根ようるとかいとれし
う。せうかも見中。いきうふれとはかはまて
かして。色の海とうんとうもとつて
吹しきいかへかの長牛み

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なれば・物と云ふ事あるなり・是らは何の物の名ぞ・
かうらうちうかいこと也・さうわ梅花のこと・きくわ菊
花の異名なり・うらかすいなつまと云は月物也・さ月物也
と云ふ事なり・杜牧の詩に云ふ・しらは老
杜子美堂の図を・欲記とうつうて・ふるとうよう
清義堂ふしとうむかの云葉にたくさんと花・さもすれ
し物うかうらたとへて・新年のかうらいのとさに
とかくこと葉・うめたてさいたもつさしし・うめ
なる白ものれたを・ふるうら・数のけて・ちかうる・人も
ゆうさぬうらいのうらもむるたに・なるうれ
のうへとのかうとをくこつけ・其の長の枝うをと

るかはつうこともふ・まいのうとうけうを世法へかと・ま
みのうをいとみうをたる・春の日のとく・春月ふて
かんとす・陳のうしの梅・もなを引きんとわい・末
の葉みうかうく・衣しうみうよ・山風と分ま物せ
くを・花ものを・かうあるを・山つみるやあん・ま
ぬふ見て・花と・ゆうかかる・数して・ゆうふをあるを世ぬく
ま・人くうを・こいたまを・ま・十四八ま
しとうこと・蔦葉衣のゆうとうこんと・こいたれを・わ
ふうしく・法ま・ふうを・ふるを・ふへて・人うるを
ぬとうぬふぬしのとゆ・葉・ゆかきい・この比のうら
かを・ふ・ふうこうれるゆうこと・衣のうとれうの花

うれをえぬ時・うるしなとうるはぬなれと・いとうれし
しとおもはきるん

我宿よりうるはしき雪ゆう寄くるはのうら
おもしろい物うら衣のうらはを思へ

かくしこい物ましまや

道春法印にうるる云系

同

唐人の船をうしなはせ・時ふ山水よりこちらはす
物をいの三日ハ・白氏河のうらに遊よ和とへ物ふ
大律にうせうえうめ物のうら地ふ・ふるこかうの
文もうるかと・物ひをとかまふし若恵・うるる物武

物のうらるる・花見かうのうらはすくらうと・梅の
なるかく・むうるうるしきうる・物のうる・春のかうる者
是の者とやてあるうるうるうるのうるしまるあ
ちくうるの中ふ・初めすくうちのかうかいうる
ましたくかるいい・物んうをかるて・堂ふのかうる福て
かくうんことのをうるこ・東の宮津うるいうまま
かくすやうて・私のうりみ物みるまま物ねと・かうるして
このうるかいいとうるかくく・ふううう・うるをた
ちをあるる・やこのてうるまるかるぬも者くく・物の豆
うをはをあるをうりうとみ花・盃をうて・者ねをしを
うるかをやめるいせの海のしふ物ふと・物のうしまるうる

と、高くもりたる山みえのまて、去かたをそこなひ、醉花
しけるうへん、猿のかしまること、わらはせん、只惜うす
はるかと、かすみはほそむしたかなかと、やまかゝる西
のけ、とはうゝ俗しうをもかくのものをらるゝ、五月
雨まて、せゝをこゝろ、一日雨はるゝ、そこはる
ゝかくうゝ俗ゝ、ゝとうゝ西のなかを、逐年はうゝ中よ
ゝ、と思へゝゝとゝ、かゝゝ、筆よゝゆゝて書はゝ

百叩一門開　君来對酒盃
履痕何敢惜　花徑与青苔

武仲ゝまゝゝたゝゝうん、まうてゝをる年のゝと、
ゝかゝゝゝ思ゝしゝのゝをあゝいやゝ、かゝこゝ生

まゝのゝし顔とはゝゝて、ゝゝ花序ゝゝ詩
ゝゝ、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
度とゝゝうゝとゝ、腹よゝあゝゝゝ九四ゝゝゝ
ゝゝゝ、かゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
地ゝゝ、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝん山かゝ花きく山吹ゝ
ゝ地のゝゝゝゝゝゝ屋人

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山吹ハ醉醾のゝいかゝ、数々ゝかけるゝ文字のゝゝる
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ら・茅葺なる山吹又山振花ともかきて・巨勢丸主殿
の作なり・椿・ほうし・昆布・八千代・ふるぬし・そもの
ぞ見てを・あらい棟の字とぞとらいもらぬのん・
杜若い香草ぞ・杜衡・ちらとかて・萩原
女郎花蘭・ちぬ文字ぞ・かるぬ・ぬ・ぬ・ぬ
かして一様なり・山茶し山柳のうぬ・ぬ・ぬ
ぬ・ぬ・ぬ・

和

千紅萬紫落殘春　此物無心何獨新
胡蝶樽前百年年　對花不飲是癡人

夜ふけて山吹し
夕霧まことに物なる女人

佐田門のかがよりたる玄象

同

人の公祐ちをわかつふしうつ・とれいたるみこなら
ひい・むしう今と驚くへうかの祐と・ひのうてい
あれうちうかのうむ・とゆはをかくゆはを・立中と思い
うむしきるゆや・ちかの星ゆて・ちむ人ひのうし。

むきしくせうとこせ・むかやうにうしかこも
ゆせくけと・うゆはうしいゆ日かて・ひをくゆ
まに・ち月のちはゆよ・雲井の居のけをゆかを
ゆうと・雲ひうしかけのやに・佐田門ひ伝うし
せうゆ・むこと〇と物る白龍て・ゆに
思ひけつはうゆかゆまうるん・ゆまとを
ゆこゆぬうけいひうけ・ゆのう居ちう
けうをひうしい・うゆけれ祐見ちゆ物ひ
思ひのうけ半ひけ・ひけうふとの山星の長まそ
うしうゆと・ち居ひけにけをちゆて・ゆのか
きけをぬうしい・むとひきうしと・ことはゆいよ

とかくいとゝくれぬるに・そらにもしらぬ雲まく
らめなれ・なるゝこゝろの色もあれと・又ものをしこの
らしもものは

こゝろとい山のしらぬ所にはて
ものこゝろ行ることのもみし
かしこの家の山風いかんし
家もしきりぬらん夜かな

妙寿院餞別

同

ゆくすえいとゝなるすゝのまつ・なう秋
惺嵩師・山里の月うんと蓬ゝ餞別入路今何

きし・二千里のあし思ひ出るまとまりて雨ちゝ紀
袍いいそなれて・ゆくゝゝ・とうこゝろぬ・如何
ものや・こゝ夜しもかさゝめる雨雨ゝ風深ゝ
こゝかきゝかる雲のきゝ・紀・紀ゝまゝ紀ゝかゝ
の秋の夜ゝ・中ゝ・ゝゝ・ゝ・ゝの酒と
のゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
人ゝゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
河のたゝものゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

今幽枕をうゝ深入てその風調れて
れこかまし

山爾滂沱佳節空　曉堂作霽倚清風
望中八萬三千戸　莊點洛陽成月宮
佳月常雖好　中秋更若新
一樓同此會　千里豈相親
今夜舊朋友　明年何主賓
浮生無定在　快笑仰蒼昊

初しいそ君一つたに一とせの
ゆうれとこそ月よみすもや
今夜をも秋ふかの月ける

世と教ふ萩の上風
天の原よ雲うゝ山らしをるあと
毛とうるせしいなくあるし・林樹
面徳よ・出て三角う給うん
音わうれるを雨うちを記
祈う・住をあてをうう・
をを・行せうかをいつ
かれと又對面しえをあ
書うて・作れしを待つ
をう中・思いのうた・行
行やと・笑をとあに

かの方に一樹のとがのもとに男女・ふみのやりとを落
する幽玄のいと・筆うつくしう思ふしの所に物を
しめうつと見付れば
紀貫なくきれ濃かにふみ分るや
うのいつくしうとまりける
うの紀貫去らでぬ時やなかし
いきとしかの星祭りの夕べ
とふみ落つるか・為家の大納言とやらやの事・
まうしへと歌河のうかとをぬく・すこし泉式
かのふとふみ落つる方なしかる古津よかを
らへて・うのもいつくしいのとうちうみうたうれ
ぬ物ぞ・ぬ・ぬ・ぬ

あるらいとてかん・さらに見ぬ人を形見にうれしき・墨ち
まぬれなるまねなれども・とのしきをもうら田の
うや・ちかうらいとたまるうし・ゆしとう見まりや
いうらたなりや

君も思へ我も志のちんあい衣
うらうかしかりまて　津かうまて
あこかもまりうらたふいてきのみ
紀のせたうらを人かうめを

春日の御唐れ餞別

同

ぬしいあるまの出文うらも・のかり給へるかとうれ唐い

むうこうあれ恋と物とこ後ようもて・ある夜義よ
見給いしのういくうらいたこのれはほれ和を
うもまううあもひて・今乃天の下まうこう給へ
こ・ゆうもれ君ぬ・むうこのかるみうれうもう
和ほうあて津うまうくうれ木よて・井陰
ううれ冊好守又・う津とのうやうれ出を
まうう和よて・出雲八雲れうちみき・ゆうく思い
入めこうみうしうちいい・いしやむうとかりきる・父の
故法度のまうはとれをいうらる・かるみと
あまへく・ゆこうかうれみうう涼く・かのうくみ
ぬあまて・美のうへとのううれみめくまれうは・世と

たてまつらんとなりけるに思ひ
もよらぬ国の寺・志賀寺にとて・三
郎よりせめ・川よりかつぎ海よりはこ・陸にはこ
ぶね・風ときたる藤波はつ
ぬ・とりの能あり・老ぬかまりある尼法しまり
たちまちに入言らくてれ和ほく・さりこまま
りてをなりかすかりかく・こまこまいねれ
ん・御門をうらめ完国安・言ん・有れ仏とつ
大なりしかのを・あるしかし・神神ろ
あるなれなるとぬ法はたうみのもるいるまま
なへのん・をへ御弥あまりて・華原の中はをと

わきめ法へ時・天のうめ法乃見うををうもに記き
おておるを・うしなみをけるを・今三笠山の
海あれまた・春日大明神のれめくみかし・うれ
この所をみををれの・れかうれみうれく・れ
厳法はをへむうををめうを法・長日ををれ法
れをうを・由うをみを光と和を・麗をまうを海
うををうをや・はをれ内みまう法へるを海をを
をくれうみて・へくをうかう・をれのれほを
ちうを・れをくうちをまれ・れをあれを
見法へるをくせ・はれの世ゆうれまて・ををまるを
法をのかをををへのををく・二日二日・のをて海て法へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て行山の末にのこりたる
世の中のうき事をいきて去日暮よ
うきて物のたゆまの書の
終りにいと世のうはうなりて
かくて面白時とする思いとの人、兵庫つるもの
うへなる面

永喜法印餞別

同

林子のかくかく見の何のこの人まもる
とうれをきいうらく・御面をうみら見
人のおもをあるまいあるとそれは海山城国をや
はるるその若い中のいかをかれいかりの
こまるうはしいををうかう見渡ら向よかを
の居てうち帰あるうきめうなかなる寒を陣を
うを生きん人のあるまをきいとうをうかやかを
はしろうもいかれかる・うるいのはこを保に
れうにれかりいまり如かるからはてのをいなを
いう無のう・はうをいのうまうめるをいを
うるを思をを年をうをいのをいを
いのをは野をををを思のまら
妹うもをいい若いはをいをも
何葉をやうん見はへ思うかを・漢人をや見

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

莫嗟此別為官職　客夜来眠夢一奇
丁固声名都富貴　羅含德化是文詩
野花白〻馬蹄去　原柏青〻牛笛吹
只恐天涯消息乏　孤蓬飄溝奈帰期

正意法橋餞別

同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とゝ
る橋とゝのせんしかとゝむうゝの人の神のまし
ゆうゝく小無野の浦りゝ百重とゝし
うゝぬゝ後きゝ波かへをかゝらゝ見んゝ
なゝて廿余日ゝかりのつまの遠ゝゝ武蔵
野乃冬の寒ゝし見かゝて女ゝとゝかゝ
いきん紫乃花きゝゝゝとのゝゝとゝ
ゆゝ紅葉ゝ由かゝりれ寺めゝかんとゝ
はかりゝやゝゝかゝかゝ河のゝいゝゝ林の
枝ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
李杜乃詩ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

扶桑拾葉集巻第二十九中終